国語の変遷と歴史（要旨）

亀井孝

国語学会の十周年記念の公開講演会に当つて、講演を依嘱されたわたくしは、かかる講演会の性質を顧慮して、題目を一般的な問題に択ぶこととした。かくして掲げられたのが、「国語の変遷と歴史」である。もとより、講演は、この題のもとで行はれた。ところで、講演のあとで、これを、十周年記念号に掲げてほしいとの依頼をうけた。しかし、これを、そのまま発表するのは、わたくしの本意でない。それは、講演のために、題目を一応あのやうな形にしたのであつて、講演自体のふてぎはには忸怩たるものがありはするが、とにかく、印刷の形で発表するには、本来、説明のために択んだ実例についての解釈、つまり、個別的な問題の方に重点を置きたく考へてゐる次第である。

わたくしの択んだ実例は、ただひとつであつた。それは、いはゆるハ行音の歴史である。なぜ、ハ行音の変遷を特に例として択んだか、また、この一例に限つたかについてのわけまでを、ここにくだ〳〵しく述べることは、さしひかへる。ただ、注意すべきは、ハ行音の変遷は、主として、いはゆる音韻論外の現象である。（語中のハ行音とワ行音との混同のばあひを除くと、知的意義の分化に直接衝撃を与へるところはなかつた変化といふ意味で）。かかる特殊な性質の音韻現象をもつて国語の変遷と歴史といふがごときをはめて大きな問題を論ずることには、それ自体に問題がある。わたくしは、講演において、なにひとつ、問題を――それが一般的な性格のものであれ、ハ行音に関する特殊なものであれ――解決したのではなく、単に問題のありかに対するいくつかの指摘だけをしたのである。そこで、ここには、わたくしの指摘した

ところの問題を問題として示して、ひろく国語および言語の研究に心をよせるひとびとの参考に資したい。わたくしの期待するところが、わたくしの提起した問題に対する肯定にではなく、批判にあることは、いふまでもない。ハ行音の歴史に対する音韻論的な解釈は、別の形で、これを発表したい。

一、p→F→hの変遷は、そのまま、歴史であらうか。

これは、発音上における変化の一般的傾向として、日本語に全然縁のない言語においても、まつたく同様の現象が起つてゐる（シナ語、スペイン語〔カスティリアン〕、ケルト語、アルメニヤ語）。かかる現象が、ある一定の言語に限つてそれぞれに、なぜ起つたか。その個別的な理由の説明が施されなければ、かかる音韻の変化の記述は、言語の変遷の記述にとどまり、それぞれの国語の歴史の記述とはみなしがたい。

いはゆる唇音退化の現象は、もとより、最少努力の法則によつて説かれるではあらう。しかし、これは、特殊な現象のその特殊性を、それ以外の説明では説けないところのしかたで明かにするていのものでは、もともとない。したがつて、それは、歴史の説明にはならない。

p→Fの変化にあたつて、日本語のFが、歯唇音とならずに両唇音に止つたのは、日本人の骨格が影響してゐるかもしれない。歯唇音を発音するには、骨格上、下顎が、なるべくうしろにさがつてゐる方が便利であらう。しかし、かかる事実が、かりに音の変化に影響を及ぼしたとしても、それは、歴史的現象を説明するものではない。F→hの移行についても、日本語のFが、歯唇音でなかつたといふ消極的な事実は、与つてゐるにしても、かかる音声学的背景は、歴史的現象とは、かかはりない。

日本人は、概して無表情であり、西洋人に比すれば、殊に、たしかにさうである。同時に、いはゆる東洋的微笑を口もとにただよはせる傾向は、静止の状態における唇を、十分にきりりと閉めない表情と対応し、そして、かかる表情を習慣

的に固定する。他方、唇音は、他の音に比すれば、いちじるしく顔の筋肉の緊張を伴ふ音である。p→Fへの徐々な推移には、唇をふくむ顔の筋肉全体についての、日本人の姿勢（顔のすがた）が、長い間に影響を与へたかもしれない。閉鎖音の摩擦音化が、唇音以外の音についてはもとより起らず、唇音についてさへ、pだけに起つてゐることは、却つて、表情と関係があるかもしれない（bよりは、無声音のpの方が、筋肉に多くの力を要求する）。しかし、これもまた、歴史を説明するものとしては、不十分である。

二、p→F→hのごとき変遷を、ただちに、時代の文化とか精神とかと関係づけて説けるであらうか。ある変化が、Aといふ特定の時代において起り、その時代以外に起らなかつたとすれば、その変化と、そのAといふ時代との間には、なにらかの内面的な関係がありはすまいかとは、ひとの予想するところであらう。

実際の発音では、一つの音韻も、いろ〳〵な形で実現されてゐるのが実状である。しかし、それ〴〵の音韻が、他の音韻と、互に力の均衡状態をたもつてゐるかぎり、一個の音韻に対する具体的な音声は、それが、実際にはいろ〳〵に実現されても、これによつて、音韻の自己同一そのものは影響されない。音韻の実現には、いはば、同時に求心力と遠心力とがはたらいてゐる。音韻とは、いはば、さういふ求心力と遠心力との中心である。数学的な直観では、かかる中心は、一点であるが、音韻もまた、音韻論を成立せしめる普遍的な基礎概念として、実在には対応しないところの、直観の形式と考へるならば、音韻の本質は、無内容である。音韻変化とは、かかる力の中心が、力の均衡の体系において、その位置をずらしたことに対する社会の承認である。（厳密にいへば、点は位置のみあつて、大きさはないのであるから、点とは、じつは位置そのものである。かかる観点にしたがへば、力の均衡において、ずれるのは、位置と位置との関係である。したがつて、音韻変化とは、社会によつて承認されたところのかかる関係の変化であり、それが、実現される音声に恒常的な相違をもたらすのである）。本節の末の補註参照。

社会は、音韻がその位置をずらすことによつて、それが体系にもたらす均衡のずれに対しては、関心をもつが、一定の社会に属する個人個人の音韻体系の内部において、音韻がその位置をずらしてゆく運動に対しては、社会自体は無自覚である。ただ、一旦、一つの社会で新しい位置が確認されると、位置のすりかへは、社会から社会へと伝播してゆく可能性ができる。このすりかへの遂行過程において、pとFとのくひちがひが社会的に意識されるならば、それは、保守的感情と結びついて変化に対する抵抗力となるであらう。であるから、もし、変化が、たとへば、pとFとのすりかへが、時代や社会に対して内面的な聯関をもつとすれば、それは、変化を阻む意識的抵抗といふ、むしろ消極的な形においていちじるしい。したがつて、変化において、社会的にして歴史的なのは、抵抗の強弱とその後退の諸相なのである。抵抗の後退と伝播の進行とは、うらはらである。伝播の結果が、平面に投影された形で捉へうるならば、つまり、言語地理学的に捉へられるばあひには、（p→F）といふ一個の音変化の事実全体に関して、いまや、われわれは、その社会的な伝播の径路を再建してみることができる。音韻変化は、音そのものの音声学的な意味なり、音韻論的な意味なりにおける変化としてではなしに、一定の社会の内部に起つた所の社会そのものの変化として、社会の歴史を形作るものとなることができる。つまり、理論的な可能性として、pからFへの変遷が、もし、歴史として把へうるならば、把へうるのは、かかる視野においてである。琉球におけるハ行音については、かかる視野が実際に成立しうるであらう。しかし、他方、かかる視野は、言語の歴史それ自体に対する視野では、むしろなくして、社会史の一環としての言語に対する視野である。これでは、伝播の遅速と規範の交替の歴史は説けても、変化そのものがなぜ起つたかは解けない。

補註　上に、音韻の本質は、無内容だと述べたのは、純粋に哲学的な意味においてである。経験的には、音韻は、それぞれ、一定の内容的規定をもつてゐる。たとへば、有声音だとか、鼻音だとか。けだし、実証的な研究において、われわれに、具体的に与へられてゐるところのものは、一定個別の各言語の構造の単位としての、特定の諸音韻だからである。

三、日本語に、はたして、唇音退化の傾向が支配してゐるか。

*p*に発してhに到達した変遷の全系列を唇音退化とよぶことは、現象を概括化するところのことばとしてはさしつかへない。また、さういふ傾向が、一つの傾向としてみとめられることも、否定はできない。しかし、結論的事実からさきにいふならば、h音の成立によつて、日本語の子音組織（厳密にいへば、子音組織における無声と有声との対立）は、次の均整を獲得し、唇音についていへば、ふたたび、音韻としての*p*をもつに至つたのである。（次に用ゐる記号のうち、＃は、R・ヤーコブソンの使ひはじめたもの）。

b d g z ＃	バダガザア
: : : : :	: : : : :
p t k s h	パタカサハ

p゛t゛k゛s゛h	
: : : : :	
p t k s h	

つまり、p対bの音韻対立が、今日では、ふたたび、回復されてゐるのである。これは、唇音退化とは、逆の方向である。唇音退化といふことが、いひうるのは、*p*→F→hの変化系列のみを、直線的にながめるからである。そして、*p*→F→hといふ音声の変化だけなら、はじめにいふとほり、日本語以外にも、方方に起つてゐる一般的傾向である。構造と機能の立場からみると、清音のハ行子音が、hになつた以前の段階について、あらたに、解決すべき問題が生ずるのである。はじめに断つておいたやうに、この問題は、別に取扱ふつもりである。ただ、どういふ視野が必要かについて、簡単に、つぎに述べる。

四、ド・ソスュール(F. de Saussure)の通時論(Linguistique diachronique)は、ただちに、史的言語学(Linguistique historique)であらうか。

ド・ソスュールは、周知のごとく、いはゆる言語史の研究に対して、科学的な文法研究——いつそう厳密にいへば、言語の体系的研究——の意義と重要さを強調したさい、言語史の研究を通時論、言語の体系的研究を共時論となづけた。通

時論的研究とは、たとへば、さきだつ或る一定の時代Aにおける音韻αと、Aに対して一定の時間的間隔をもつ一定の時代Bにおける音韻βとの対応関係を時間の軸に沿つて、あとづけるものである。対応が、時間の軸に沿ふところの前後関係であるといふ意味では、α対βの関係は、二つの異なる時点をつなぐ線となる。ただし、かかる直線として直観される関係の背後には、等質的な時間の連続しか考へられてゐない。かやうな時間の上にいはば浮いて流れてゐる一つびとつの要素は、それそのものとしては、本質的には、時間をその成立の契機としてふくんでゐない。αとβとをつなぐ一定の連続は、無限に分割の可能な、そして、また、無限にのびるところの直線の一定の長さとして、またαの位置とβの位置とは、無限の直線上の二つの点AおよびBとして、幾何学的に直観されるのみである。共時論の方は、たとへば、p：b：m、t：d：n、k：g：ŋのごときそれぞれの対立を、直線的な時間上の一点Aにおいて、すべてシンクロナイズすることによつて得られる全体的視野である。通時論と共時論の、この言語に対する二つの視野について、ド・ソスュール自身は、共時論の方を、時間と関係のない体系的な視野であるといつてゐるのであるが、以上のごとくみれば、通時論的視野も、別に、本質的には、時間と関係はない。むしろ、それは、言語に対する直線的視野であり、それに対し、共時論は言語に対する平面的視野なのである。しかし、哲学的にいへば、かかる平面的視野は、歴史を、その非連続の面から切りとつてしまつたものである。われわれに課せられたしごとは、非連続の連続としての歴史を捉へることであらう。それは一言にしていへば、共時態の立体像をゑがくしごと、すなはち、構造と機能——これは、ソスュールにおいては、共時論的概念である——から、言語の変遷を解釈するしごとである。単なる通時論ではなく、しかも、言語地理学のごとき外的言語学——これもソスュールのことばである——でないところの、つまり、内的言語学としての言語史の方法があると、わたくしは、考へるのである。

（ただし、現実においては、完全に内部的に等質で、かつ外部に対して何らの方言的接触をもたないといつた言語は考へ

られない。わたくしが要請するところは、内的言語学としての言語史の方法であつて、言語史は内的言語学であるべきだといふのではない)。

〔追記〕ハ行音(h)をア行音と対立せしめる考へは、考へそのものとしては、つとに筆者のあたまのなかにはめばえ、一つの解釈といふ意味では、これまた、ひとに語つたこともあつたが、これを公けにしたのは、こんどの学会がはじめてである。しかるに、じつはすでに、同様な解釈は、服部四郎教授によつて述べられてゐるのであつた(音韻論から見た国語のアクセント 国語研究第二号 四〇頁以下参照)。したがつて、あの解釈は、学説としての提出においては、服部教授のものである。わたくしとしては、自分の考へが、尊敬する服部教授の解釈と一致する点において、はなはだ満足である。そして、理論的にいふと、ヤーコブソン教授やマルチネ教授に、現在、多くの共感をみいだしてゐるわたくしとして、この一致は、かならずしも偶然でないと思ふ。ただし、日本にも、国語学史上においてハ行音(h)を、ア行音と対立せしめたひとがないではない。これは、蜆縮涼蕨集の著者であつて、彼は、ア行(喉音)に対して、ハ行を変喉と呼び、ハ行を五十音図で、ア行のとなりにもつてゆくのである。(蜆縮涼蕨集の著者が、音韻の問題に対して、きはめてすぐれた資質にめぐまれてゐた人物であつたことは、かつて、筆者自身本誌に書いたことがある。「蜆縮涼蕨集を中心にみた四つがなの混同」、本誌、第四輯参照。)

——一橋大学助教授——